四国・水こぼれ話
Water Information Saloon Shikoku
談話室 Vol 96

紙芝居で語り継ぐ先人の苦労
～わがゆめ水路トンネル～

高知県　四万十町長
前田（まえだ）　哲生（てつお）

四万十町は、高知県の南西部に位置し、東から西に流れる四万十川の中流域にあり、東南部は土佐湾に面し、総面積は642.06㎢で淡路島より広い自然豊かな町域となっております。

本町を貫流する四万十川から、水の恵みを受けている台地部では、標高230mで昼夜の寒暖差が大きく肥沃な土地から、仁井田米や生姜が生産され、また、海岸部ではミョウガやピーマンが生産されており、四万十川の下流域では、四万十桧や椎茸などが代表的産物であります。

「法師ノ越水路トンネル」は、本町の最上流部で上秋丸地区にある、四万十川本流から取水堰により直接取水し、法師ノ越山裾を大きく迂回する四万十川沿いの水路によって、下流の一斗俵（いっとひょう）地区と、市生原（いちゅうばら）地区の耕地20haの灌漑用水として使われてきたが、明治23年（1890年）9月の大洪水により、法師ノ越山裾を迂回する部分すべてが決壊したため、修理を行ったが、再度の洪水により再び決壊した。明治25年（1892年）に大復旧工事を行ったが、またまた洪水によりすべてが決壊した。

もとは土佐藩の侍であったが、市生原に帰ってきて農業をしていた野村成満が、毎年起こるこの自然の猛威から農民を守るためには、法師ノ越山に水路トンネルを掘る以外にないと考え、明治27年（1894年）10月に両地区の農民を説得し、工事費1000円を集め、自ら測量し工事に着手した。

掘り始めると、山は岩石で当時の手掘り作業では工事は進まず、見るまに工事費の1000円はなくなった。成満は、これ以上の工事費を農民に負担を課すことは忍びないと、自分の田畑 3.5ha、山林1.8haを売却しこれに充てたがそれでも足らなかったため、今度は弟の野村成晴の田畑1.4haを売らせて、総額5000円の私費を投じて、10年後の明治37年（1904年）1月にようやく完成した。

手掘りのため、硬岩に行き当たると柔らかい場所を探して掘り進めたため、中で「コ」の字に曲がっている箇所や柔らかい箇所を通したため、落盤もあり、また、両側から掘り進めたが、一向に行き当たらず調べてみると、出口側のトンネルが途中から 4mも高くなっていることが分かったりで、地元の農民の間では、「成満のトンネル馬鹿」と言われたこともあったが、この献身的な努力により、被害を受けていた川沿いの水路が1640mからわずか 256mのトンネルに短縮され、農民は洪水の被害から免れたため、毎年の負担が大きく軽減され、農地も 37.6ha となり四万十川の恩恵を受けてきた。

その後、平成9年9月の台風第19号で大規模の崩落があり通水困難となったが、国庫補助事業を導入し、243mの新しい水路トンネルを開削することとなり、平成16年3月に貫通竣工した。

その野村成満の業績を後世に伝えていくため、受益者の一斗俵・市生原水路組合は、感謝の気持を込めて、『わがゆめ水路トンネル』と題した、紙芝居を作成し、地元と町立図書館に置き、地域や学校また、各種の会合等で上演しており、野村成満の偉業を後世に語り伝えております。

野村成満が開削した旧の水路トンネルの出口

『わがゆめ水路トンネル』紙芝居の状況